



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	未完結文における語用論的選好に関する研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	劉, 曉萃
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12076号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61593
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Liu_Xiaoping_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 劉 曉 華

学位論文題名

未完結文における語用論的選好に関する研究

日本語の話しことばで文を最後まで言い切ることなく完結させないままの形式が多く用いられることは、古くから指摘があることである。完結した形式を持つ文を文の典型とすることは、近代文法教育において強化され、日本語を用いる者は書きことばで完結した文を用いるのが普通でまったく抵抗がないが、ややくだけた会話では文の完結は比率が低下し、個人差はあるものの、ほとんど用いないケースも見られる。話しことばの研究が進展した現在では、この種の未完結の文は日本語記述文法などで「言いさし文」と呼ばれ、その形式や特徴が多角的に分析されている。

本論文は、日本語におけるこの種の言いさし文を「未完結文」と呼んで分類し、通言語学的な観点からの非従属化(insubordination)として捉え、それが日本語の構造特性また運用上の選好構造(preferred structure)によって発達してきたことを統語論と語用論の観点から論じた研究である。統語論を踏まえた語用論は、両者のインターフェイスから現象を取り上げる統語語用論として近年盛んになっている。本論文は、統語語用論の研究成果としてまとまった形になった、初期の成果ということができる。話しことばにおいて文の完結を避けるという日本語話者の特性は、日本語の現代的な変化として社会言語学的な研究の中で個別に取り上げられることが多かったが、関連する事例を幅広く集め、日本語の本質を見据えて分析している点で従前の研究とは性質を異にしている。

本論文は、5部構成で、12章からなる。以下、各部・各章について簡略にその内容を述べる。

第1章は、研究の目的・方向と構成を述べた序説である。第2章では、先行研究を広く概観して、非節化(declausalization)や選好(preference)などを含む、本研究と関わりの深い統語語用論の方法論や知見をまとめ、考え方や用語法についても確認している。未完結文は、これまで研究領域によって、言いさし文・中断節などとも呼ばれてきたが、先行研究における関心の差異を踏まえた上で、「未完結文」を採用することを述べ、この現象に関する従来の研究を丁寧に整理している。以上が第I部の内容である。

第3章では、発話における文の要求性を考察している。文が発話として用いられるときに、発話内力(illocutionary force)が生じることは発話行為論の研究などですでに指摘があるが、本論文では、それを会話における発話者から聞き手に対する「要求性」として概念化し直すことを主張した。

次いで、要求性を詳細に検討しながら、無標の要求（社会規範的要求）と有標の要求（会話的要求）という2つのレベルを設定した上でつごう6種類の要求区分を提唱しており、さらに未完結文の形式的分類を行って、形式ごとに未完結文の要求性を分析している。第4章では、未完結文における境界性を論じ、完結文との文法構造上の類似性から評定する形式的完結度と、要求性との関係から評定する意味的完結度を、境界区分の仮説と整合させつつ分析している。先行研究を修正する形で、弱境界・強境界・特強境界という3種類の境界区分が未完結文の従属節末の形式について設定されている。以上が第II部の内容である。

第5章では、未完結文にかかる語用論的な条件を外的要因と内的要因に分けて考察している。未完結文の逸脱性には運用上文的な制約が課されることを想定しつつ、使用を可能にする要因を細かに分けて論じ、未完結文の使用にかかる制約について整理している。未完結文は、日常卑近のやりとりでは多用されるが、公的な場面ではあまり多くないことから、文体との関係が指摘されてきたが、本章はその点を分析の対象にできるように理論的な整備を行ったものである。この点に関する感覚的な指摘は従前にも見られるが、書きことばと話しことば、また、公的な場面など文脈としての制約が生じることを論理的かつ明確に整理した研究はこれまでなく、重要な成果と言える。第6章では、未完結文の選好を先行研究における「正の動機」から論じ、未完結文に情報量が多い場合に選択への傾斜が生じ、それが伝達の経済性と関わることを指摘している。接続助詞などを文末に付加することで解釈に関わる情報が増えれば、それを目的として未完結文を選択しようとする動機（正の動機）が発動すると考えて、分析を行っている。第7章では、同じく「負の動機」の観点から分析を加え、話者交替適切場（TRP）における交替容易性の強弱からポライトネス・ストラテジーとしての未完結文が使用されることを指摘し、あわせて、従来のポライトネスと区別される次元のメタポライトネスという概念を提唱している。フェイス侵害の回避のほかに緊張関係の回避を目的として未完結文が選択されることが指摘されている。文を完結することで、TRPにおける緊張関係が強まったり、聞き手のフェイスを侵害しうる発話だと解釈されたりする場合には、それを避けようとした結果未完結文が選択される動機（負の動機）が生じると主張している。以上が第III部の内容である。

第8章では、意味機能の完結している未完結文を文法論的に議論する場合、「言いさし文」という構文として分析するべきだとの立場から考察を加えている。未完結文あるいは言いさし文という呼称がそもそも不完全で逸脱的な形式あるいは現象を想定しているが、本論文では、構文としての独自性と有機能性を認めて、重要な構文現象として取り上げている。未完結文の形成過程では、先行研究で指摘された省略と付加が見られることを論証し、その区分をさらに精密化している。前者は、意味論的省略と語用論的省略の二種類に分けられることを主張し、その関係と特徴を分析している。続いて、第9章では、「なきゃ」／「なくちゃ」、「ないと」、「たら／ば」、「って（聞いた／言った）」で終わる発話を中心に、意味論的な省略による未完結文の形成と特徴を考察し、第10章では、「のに」及び「けど」の対比、「から」の因果関係、「て」の並列関係を取り上げ、語用論的な省略

と付加とに分けて、それぞれを用いた未完結文について分析を加えている。これらは接続助詞が本来持つ2つの節の接続関係を出発点にした分析であり、どのような制約がかかり、どのような類型があり、どのような特徴があるかを、推意や推論についても明確にしながら詳細に論じている。第11章では、「みたいな」と「というか」を例に、未完結文の形式的な固着に伴い、未完結文における言いさしの標識が機能拡張して談話標識へと変貌する過程を論じている。接続助詞など、本来節末に置かれる形式が、文頭に用いられて接続詞に転ずる現象は日本語では珍しくないが、この拡張過程が言いさすことによって進展したと捉えて、形式的な場合分けをした上で細かに分析している点に新奇性がある。以上が第IV部の内容である。

第12章では、全体をまとめ、残された今後の課題を述べて、全体路の論考を閉じている。本章のみが第V部をなす。

上述のように、日本語における未完結文を多角的に論じた労作であり、今後、同様の研究テーマで研究する際には参照しなければならない成果となっている。

以上